

□ 器楽（室内楽を含む）

渡 辺 和

年頭にはコロナ禍も終焉に向かうかに思えた2022年だが、2月に始まったロシアによるウクライナ侵略で、音楽界の混乱が一層複雑化した1年となった。

そんな激動の年は、生誕200年のフランクと生誕100年のケナキスの記念年でもあった。後者は音楽大学や現代音楽関連主催者が様々なレクチャーやシンポジウム、特別演奏会を開催する賑やかさだったが、佳作な前者は些か地味。とはいえ、巨大ロマン派オルガンを有する全国の公共ホールでは、2月19日ミューザ川崎の松居直美プロデュース記念演奏会を皮切りに、様々なオルガンイベントが展開される。秋の生誕日に向け日本オルガニスト協会が積極的に記念年をプロモート、栃木県那須野が原ハーモニーホール（7月2日）、茨城県水戸芸術館今井奈緒子（9月20日）、神奈川県神奈川県民ホール小川有紀リサイタル（11月4日）、東京都新宿文化センターフレッシュ・オルガンコンサート栗山美緒、猪股友枝、山司恵莉子（11月13日）、神奈川県横浜みなとみらいホール近藤岳オルガニリサイタル（11月25日）、愛知県愛知県芸術劇場コンサートホール吉田文（11月30日）など作曲家を顕彰する演奏会が並ぶ。他にもフィルハーモニーふくい（8月21日）、豊田市コンサートホール（6月4日、8月27日、10月22日）、ヴェルサイユ宮殿王室礼拝堂オルガン奏者ブヴァールの京都コンサートホール（11月3日）など、教会や学校以外の主催者には些か持て余し気味のコンサート・オルガンというハードウェアを、記念年が活性化する好例となった。

コロナ禍で新旧交代の動きが一気に表面化した日本では、2022年初夏以降世界各地で本格的に再開された国際コンクールで順調に若い才能が発掘されている。5月にヴァイオリンとピアノ部門で開催された第8回仙台国際コンクールでは、中野りなが第2回以来の日本人優勝ヴァイオリニストとなる。11月のヴィニアフスキー国際コンクールでヴァイオリンの前田妃奈、同月ロン・ティボー・コンクールのピアノ部門で亀井聖矢が優勝した。室内楽では9月のARDミュンヘン国際コンクール弦楽四重奏部門でカルテット・インテグラが2位及び聴衆賞を獲得。複数の西側国際コンクールでのロシア国籍保有者参加拒否や、未だロックダウン類発の中国からの参加激減などモスクワ五輪やロス五輪のような特殊状況下とはいえ、日本を拠点にコロナ禍を乗り越えようとした若者らの健闘は率直に賞讃すべきであろう。

なかでもカルテット・インテグラは、毎年大晦日に上野東京文化会館で開催される「ベートーヴェン弦楽四重奏9曲演奏会」に大抜擢の昨年に続き再登場、古典四重奏団、カルテット・エクセルシオら長老中堅団体と並び後期作品3曲を演奏、現在の関心と課題を隠さずに示す力演を聴かせ喝采を浴びた。サントリー室内楽アカデミー修了後の去る9月から、カリフォルニアのエリート校コルバーン音楽院に学生レジデンスとして2年間の留学が決定。20世紀末に確立した北米室内アンサンブル育成システムに乗る初の日本出身団体となり、今後の動向に注目したい。

コロナ禍を経た音楽家らが、どう音楽を聴かせるかだけでなく、どう見せるかまで意識するようになったのは、世代を超えた現象であろう。若手から長老まで自身のYouTubeチャンネルで発信するのが珍しくなくなったばかりか、CDやリサイタルもパッケージ化、明快なコンセプトを打ち出す傾向が顕著だ。ピアニスト反田恭平が奈良を拠点に私企業として設立した室内管Japan National Orchestraは、初夏からなら百年会館と浜離宮朝日ホールで団員の個人演奏会を総計16回連続開催、リサイタルを「反田のオーケストラ」パッケージとして提供する試みを敢行した。コロナ禍で進んだ音楽家の地方移住や、全国で活発化している小規模プロ演奏団体設立の動きの中で、すっかり定着した小規模コンサートスペースでの身近な音楽受容と共に、器楽室内楽のあり方の変化を感じさせる。

外来音楽家に関しては、ウクライナ戦争の影響が決定的だった。3月から4月の「東京・春・音楽祭」や、例年の5月連休開催が中止となった「ラ・フォル・ジュルネ」頃までは、日本政府の出入国規制による外国籍音楽家の来日中止が目立った。初夏頃からは入国制限緩和で外国人ソリストや室内楽団体の日本公演が再開。記念年に予定され数度の延期となったチェコのブラジャークQによるベートーヴェン全曲演奏会がやっと開催される（鶴見サルビアホール5月27、30、31日、6月2、3、6日）。同時期に開催されたサントリー・チェンバーミュージック・ガーデンのロシア国籍奏者を有するアトリウムQのベートーヴェン全曲演奏（サントリーブルーローズ6月5、7、11、18、19日）は、来日がギリギリまで心配された。結果として、サントリーホールは大ホールでウクライナ演奏家による同国支援コンサート、小ホールではロシア人奏者によるベートーヴェンが同時に行われる皮肉な現象も出来た。

夏以降、ウクライナ戦争の長期化による航空運賃値上がりや欧州内でのエネルギー政策からのエコ運動、急速な円安と諸経費高騰と、音楽界に影響が見え始めている。6月のエベヌQ来日公演（紀尾井ホール6月16、17日など）も、メンバーに抱れば日本を除くアジア公演が全て中止、シベリア経由が停止され過酷な長距離フライトとなった日本公演を中止するか、団内部で議論となったという。年末向け、エコロジーへの関心の高まりから「飛び恥」を理由に訪日中止宣言をする欧州演奏家も始めている。延期になった公演がブッキングされている2022年内には影響がそれほど顕著ではないが、23年後半以降は来日公演の数が激変する可能性も。

コロナ禍後、聴衆の行動様式変化は明らかになりつつある。平日夜の演奏会を避け、週末への演奏会の集中現象は首都圏関西圏を越えて広域化。地方都市公共ホール担当者からは、地方では広域集客を目指す著名演奏家より、小規模でも地元で着実な活動をする演奏家の方が高い集客が予想出来るとの声も挙がっている。秋に改修工事を終え再オープンしたアクロス福岡では、平日夜に設定されたアフアナシエフと堀米ゆず子のデュオ（アクロス福岡12月1日）で集客が1割を切り、SNS上で「演奏家に失礼」と主催財団が批判される騒動も起きた。

音楽業界にも、コロナ後の地方自治体文化予算大削減に対応した新秩序編成が始まりつつある。KAJIMOTOが「大型フェスティバル差配」から旧来のアーティストマネジメントへの帰帰の動きを見せているのは、象徴的であろう。また、秋の芸術祭を前に発表された文化庁芸術祭賞の終了は、今後のリサイタルやCD作成に影響を与えざるを得ない。